

SDGsだより No. 6

令和5年度のSDGsの取り組み

令和6年3月7日（木）
学校法人 成田学園
希望ヶ丘こども園
園長 相樂 悦子



今年度の「SDGsだより」の最終号となりました。令和5年度もSDGs活動にご理解・ご協力を賜りましてありがとうございました。特に10月20日（金）の「東北地区私立幼稚園・認定こども園研修大会」においては、保護者の皆様のご支援のおかげで、0歳児から5歳児の全クラスを公開することができました。「乳児期から幼児期の保育環境を考える～子どもの主体性を育む…SDGsの視点に立って～」のテーマで公開いたしました。東北6県の多くの先生方から、「希望ヶ丘こども園は、充実した素晴らしい教育・保育環境をつくっている」「子ども達はみんな元気いっぱい笑顔いっぱい楽しく遊んだり活動したりしている」「子ども達の言葉や友達とのかかわりに、おもいやりの心があふれている」など沢山のお褒めの言葉をいただきました。ご指導の福島学院大学短期大学部保育科准教授 鈴木智子先生からは、「0歳児から5歳児各学年で主体性を育む工夫があり、子ども達は乳幼児までに育ててほしい10の姿を身につけている」など高い評価をいただきました。このように乳幼児教育・保育の先進的な園になりましたのも保護者・地域の皆様の温かいご支援があってこそです。心より感謝申し上げます。

公開保育の集録を掲載いたしましたのでお読みいただき、来年度も一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。



指導助言者 鈴木 智子 先生(福島学院大学短期大学部保育学科准教授)

司会者 滝田 明子(希望ヶ丘こども園)

記録者 原田 世司子 根本 順子 菱沼 千紘 松木 智香 森合 真弓(たから幼稚園)

公 園名 学校法人成田学園 希望ヶ丘こども園 園長 相樂 悦子

開 住 所 〒963-8041 郡山市富田町字十文字31

園 園児数 232名 公開クラス 5歳児2 4歳児3 3歳児3 2歳児1 1歳児1 0歳児1

1 テーマの受け止め方

本園ではSDGsの視点に立って、今と未来を見据えた教育・保育を実践している。園での生活や遊び・活動の中でSDGsの観点から、本園は乳幼児期にふさわしい環境を考え、設定し、体験や経験の場を保障していきたいと考えている。令和4年度・5年度の本園のランドデザインには、重点目標として「SDGsを子ども達から～『誰一人取り残さない』教育・保育の推進～」を掲げ実践しているところである。豊かな環境の中で体験や経験を通して、感動したり、気付いたり、工夫したり、考えたり、実行したりすることができる主体的な子どもになってほしいとの願いからである。そのため、保護者との連携を重視し、保育者が子どもと一貫性のある行動や態度で接することが大切であると考えている。

主体性を十分に発揮できる環境を子どもと共に創り、子ども一人一人が楽しんで遊び込んでいく保育を目指していきたい。そして、乳児期から幼児期の育ちのつながりや小学校教育以降の後伸びする力として発揮できるよう、子どもの主体性を育む保育環境を、SDGsの視点に立って考えていく。

2 子どもの姿と実践の歩み

〈事例 5歳児松組:6月のエピソードから「はないちもんめ ～ルールのある遊びの中で～」〉

○エピソード

5歳児の間では「だるまさんがころんだ」の伝承遊びが流行り、ルールを守って楽しく遊んでいた。遊ぶ様子を見ると、他の伝承遊びをする様子がなかったので、保育教諭から「はないちもんめっていう遊び、知ってる？」と別の伝承遊びを提案したところ、「知らない！どうやってやるの？やりたい！」と興味・関心をもったことから、はないちもんめ遊びが始まった。子ども達は、保育教諭が教えたルールをすぐに覚え、次の日から子ども同士で遊ぶようになった。

遊びが落ち着いた数日後のことであった。S児が「先生、はないちもんめやろうよ。」と声を掛けてきた。「2人じゃ出来ないね。他にもやりたいお友達を見付けようか。」と話す中、「じゃあ一緒に探そう！」と、仲間探しが始まった。竹組も合わせて10人の友達が集まり、「どっちのチームにする？」私、

こっちがいい！」と好きなチームに行き手をつなぐと、R児がチームの人数を数え始めた。保育教諭も入れて4人と7人のチームになった。「こっち少ないよ。誰か入って下さい！」と相手チームに声を掛けるR児。1人移動して6人と5人のチームになり、今度は「(人数が)違う！これじゃあ遊べない！」「じゃあもう1人集めたらいいんじゃない？」と子ども達で話し合い、保育教諭が「待ってるから探しておいで。」と言うと、もう1人探しに行くことになった。

6人と6人のチームができ遊びを進めていくと「混ぜて。」とどンドン子ども達が集まってきたので、広い場所に行くことを提案し移動して遊びを続けた。全部で30人程の子ども達が集まり、ルールを教え合いながら仲良く遊んでいったが、そのうちなかなか名前を呼ばれない子どもがでてきた。「私全然呼ばれない。」と言うM児。それを聞いて保育教諭が「そうだね、どうしようか。呼ばれてないお友達を呼ぶようにする？」と話す中、K児が「うん！呼ばれなかったらつまんないもんね。」と言い、新しいルールが加わった。相手チームとの勝負の仕方、初めのうちはじゃんけんだけだった戦いも、その時流行っていた遊びの「お相撲がいいんじゃない？」と提案する子どもや、「男の子の方が強くなっちゃうから、お相撲は男の子と男の子の勝負の時にしようよ。」と話す子どももいて、その後も皆で意見を出し合いながら遊びが展開されていった。

○考察

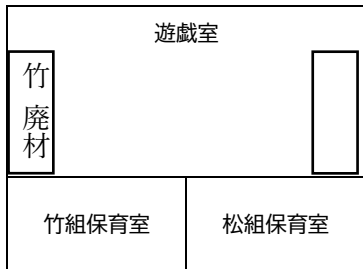
ルールのある伝承遊び「花いちもんめ」を通して、子ども達の主体的な姿が見て取れた実践であった。自分達が決めたことはとても意欲的で、自分達なりにルールを広げ、そのルールを守り、遊びを広げ、工夫する力、想像力、最後までやり遂げる力、コミュニケーション能力など、様々な力を身につける子どもの変容が見て取れた。ルールのある遊びの中でも主体性を育むことができる実践であったと思う。

遊びを進める中で意見の違いや遊びが行き詰まる場面もあったが、そんな時にこそ保育教諭が子どもの声をしっかりと聞き、子どもと一緒に考え共に試行錯誤することで、子ども達は自信を持って、積極的に環境に関わるようになった。子どもの主体性を育む為には、子ども同士、子どもと保育教諭同士が見守ったり受け止めたり、思いに応えたりする受容と応答の関わりが大切であると感じた。今後も子どもの主体性を引き出せる保育を追求していきたい。

3 公開保育当日の概要

(1) デイリープログラム(週日案: 5歳児の場合)

前週までの姿	<p>【生活】・生活に見通しをもち、生活に必要なことに気付いて進んで取り組もうとしている。</p> <p>【遊び】・友達と力を合わせたり、競ったりすることを楽しみ、競い合って遊んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お店屋さんごっこの品物製作から発展し、製作活動に夢中になって取り組んでいる。 ・季節の移り変わりを感じ、遊びに取り入れて楽しんでいる。 				
今週のねらい	<p>■様々な素材に触れ、試したり工夫したりして、イメージしたものやアイデアを実現する楽しさを感じる。</p> <p>■友達と共通の目当てに向けて、考えを出し合いながら遊びや生活を進める充実感を味わう。</p>				
月日	10月16日(月)	10月17日(火)	10月18日(水)	10月19日(木)	10月20日(金)
予想される 自ら選んだ活動	<p>■鬼ごっこ ■リレー遊び ■虫探し・虫取り ■植物などを使ってのお店屋さんごっこ</p> <p>■廃材遊び ■おままごと ■ブロック遊び(ブロック・ラキュー・カプラ・ピタゴラス) ■縄跳び ■ダンス</p>				
○本日の予想される遊び (これまでの経過)	<p>○ピタゴラススイッチを作って遊ぼう</p> <p>・16日に行われるお店屋さんごっこのに向けて品物製作を行った。今までに「リサイクル」を意識しながら廃材を使っての製作も自由に行っていたこともあり、「もっとなんか作りたい！」との声が多く聞かれた。</p> <p>・廃材遊びで、箱を使ってゲームを作った園児がいた。それを見て「ピタゴラススイッチみたい。」「ピタゴラススイッチはもっと長いんじゃない？」との声から、皆で大きなピタゴラススイッチ装置を作りたいとの話になった。</p>				
●保育教諭のねがい、援助、環境構成	<p>●ピタゴラススイッチが分からない園児もいたため、ピタゴラ装置の本や動画を見せて楽しさを伝える。道に関する本「コんがらがっち」も活用し、想像が膨らむようにする。</p> <p>●廃材を種類毎に分けて置いたり、折紙やモールなどを使いやすいように置いたりし、イメージが膨らむようにする。</p> <p>●磁石や鈴、油性ペンや両面テープなども準備し、使い方のヒントを投げ掛けながら、試したり工夫したりして作る楽しさを感じられるよう様子を見てアドバイスしていく。</p> <p>●秋ならではの素材も取り入れられるように、園外保育としてどんぐりやまつぼっくり拾いに行った。</p> <p>●子ども達の思いやイメージを引き出しながら進められるよう、保育教諭と一緒に考えたり、成功体験が味わえたりするよう関わっていく。また、作り込めるように十分に時間を取っていく。</p> <p>●友達と考えを出し合って活動を進め、満足感を味わえるように工夫する。</p> <p>●思いの違いや物の使い方トラブルになる時には、互いの思いを出し合うよう促し、解決の方法を一緒に考える。</p>				



(2)活動の様子

子ども達は秋晴れの爽やかな屋外で「落ち葉プール」や「綿の花摘み」「ドングリ等の木の実遊び」「砂遊び」「三輪車」「鉄棒」等、思い思い自由に遊んだ後、「朝のお集まりの時間」になるとトイレを済ませ保育室に入り、引き続き製作や粘土やお絵描き等の自由遊びを楽しむなど発達段階に応じたクラス活動での遊びが始まった。



<0歳児>

「わらべ歌あそび、米粉粘土遊びをしよう」

保育教諭がわらべうたを歌い出すと、一斉に視線を向けて、楽しそうに体を揺らす子ども達。保育教諭は、一人一人の子どもと歌にあわせて触れあい、スキンシップを取りながら保育をしていた。でんでらりゅうばの人形は大好きで、喃語を発しながら手を振る子ども達。小麦アレルギーの子どもがいるため米粉粘土の粘土遊びとした。にぎったりちぎったりつぶしたりと、米粉粘土の感覚を沢山楽しむ姿が見られた。



<1歳児>

「見立て遊び、大きなダンボールのおうちで遊ぼう」

絵本が大好きな子ども達。特に「3匹のこぶた」の絵本がお気に入りの子ども達は、保育教諭が読み聞かせすると一緒になってお話ししていた。「みんなもこんなおうちに住んでみたい？」と聞くと「住みたい！」と子ども達は思い思いのおうち遊びを楽しんだ。手作りのダンボールの家の中には手作りのテーブルや椅子があって、その中でままごと遊びを始める子ども達もいれば、友達と順番を守りながら仲良くおうちをくぐったり潜ったりして遊ぶ子ども達もいたり、家の壁にクレヨンで好きな絵を描いたりシールを貼ったりして遊ぶ子ども達もいるなど、おうち遊びはどんどん広がっていった。



<2歳児>

「好きなごっこ遊びを楽しもう」

新聞紙を細く丸めて剣に見立てたり、トイレットペーパーを双眼鏡に見立てたりして製作する子ども達、シールを貼ったり色を塗ったりと工夫してもっともっと素敵な遊びを作ろうとする子ども達が見られ、作る楽しさをいっぱい味わって遊んでいた。作り終わると製作した物で、お店屋さんごっこをする子どももいれば、戦いごっこをする子どももいるなど、好きな遊びややりたい遊びを、友達や保育教諭を誘って遊んでいた。自分の作った作品を友達と見せ合ったり、お店屋さんごっこではお店さんやお客さんになったりして売り買いを思う存分楽しんでいた。

<3歳児>

「お店屋さんごっこで遊ぼう」

廃材やお花紙、紙テープなどを使って、たこ焼きを作ったり、アイスクリームを作ったりと、「やってみたい」お店さんの品物づくりを意欲的に作っていた。作った後はいろいろなお店さんになりきって、様々なものを作る楽しさや「これはおいくらですか？」「百円です。」と役割遊びを楽しんでいた。お客さんが来なくなると「どうしてかな？」「売れる物が少ないからかな？」とまた作って売る子ども達もいた。ごちそうがテーブルいっぱいになると「誕生日パーティをしようよ」と遊びが広がっていく子ども達も見られた。

<4歳児>

「サツマイモや蔓を使ってあそぼう」

芋掘りの思い出が膨らむ手遊び歌で遊んだり、お芋の絵本を読んだりして、一人一人が楽しかった芋掘りの思い出を話した後、保育教諭が「芋や蔓でみんなで遊ぼうか？」と聞くと「遊びたい！」と、子ども達は色を重ねたりイメージしたり、芋スタンプを作ったり、芋の蔓を使って綱引きごっこや縄跳びをしたりして、想像力を膨らませながら友達といろいろな遊びを考えて遊んでいた。子ども達は製作に必要なものがあると保育教諭に伝え一緒に準備していた。必要に応じて保育教諭に手助けや助言を求めたり、綱引きでは保育教諭に審判をお願いしたりして大盛り上がりになった。



<5歳児>

「ピタゴラススイッチを作って遊ぼう」

前日までの続きでピタゴラススイッチ遊びを楽しんでいた。廃材遊びの箱で「何か面白い物を作りたい」「ピタゴラススイッチ装置はどうか？」と始まった製作であった。製作の準備(様々な種類のテープ・廃材)の置き場所が確保されており、遊ぶ場所と製作する場所も分かれ活動しやすい環境が整えられていて、子ども達は使い終わるときちゃんと材料毎に片付けていた。気の合う友だちと遊びを進めていく中で、出来上がった作品を互いに使用し、イメージを重ねてアイデアを共有する場面も見られた。参観者から「どうしたら動くの?」という質問に、友達と試行錯誤して、「こうするんだよ」と得意げに説明する子ども達だった。どのグループもみんな違って、アイデアいっぱいのピタゴラススイッチが完成していた。



<園全体の環境>

園内の各コーナーには「SDGsの木」や「SDGs列車」の掲示物があり、SDGsを日常的に実践している子ども達や保護者、保育教諭の姿が一目で分かるように、写真やコメントが掲示されていた。また、秋の自然物や製作物が園内随所に沢山飾られており、秋をいっぱい感じることができる環境であった。子ども達が「気づき」「考え」「発見」して生活できる環境作りがなされていた。



(3)分科会

①挨拶(成田 和邦理事長)

公開をお引き受けしてから1年6か月あまり、自園の教育・保育を振り返り、質の高い保育を目指しての本日の公開となった。ご指導の先生にはい

つも温かいお言葉をいただき感謝に耐えない。

②講師紹介(相楽 悦子園長)

福島学院大学短期大学部保育学科准教授 鈴木智子先生は、同大学院心理学研究科こども心理専攻を修了。福島県伊達市の保育園で保育士として25年間勤務。この間副園長、子育て支援センター指導員等経験。2011年度当大学保育学科非常勤講師を拝命、2012年度より常勤講師を経て2020年准教授として現在に至り、保育学科「実習指導室長」として、「保育実習」「教育実習」に関わる。

③研究発表(発表者 御所脇美香研修主任、三本松桃子研修副主任)…要点のみ記載

研究の手がかりと

して①SDGsの理解を深め、子どもが主体的に環境と関わり遊び込んでいく保育にSDGsがどのように取り入れているのかを考える。②乳児期から



幼児期の保育環境を通して、子ども中心の保育になっているか、具体的な場面を捉え、子どもの育ちを探究する。③主体性の育ちにつながる子どもの心をゆさぶる環境や遊びを保障する環境について考察するの3点を掲げ研究する。

研究方法として①研究主題について共通理解をし、主体性を育む保育で大切にしたいことを心に留めながら保育する。②活動を中心に子ども達の姿を記録し考察する。子ども達の姿を捉え、環境構成や関わり、保育者の願いや配慮点について記録していく。③記録を元に、必要な環境構成や保育者の関わりや役割について教職員で共有しながら深めていくの3点から探究していく。

これらの視点で実践研究をし、0歳児の研究の考察を次のように考えた。主体性は生まれたばかりの0歳児から始まっていると捉えるようになった。つかまり立ちを自分でやろうとした時に「頑張れ」と応援したり、つかまる環境を作ったりと、指差し行動で「触りたい」「知りたい」という活動を十分に経験させることで、物事に主体的に関わっていく力が養われているのではないかと思った。0歳児の興味・関心を大事に、保育環境を整えていくことが何より大切であると気付いた。保育室内に危険がないよう十分確認し、コーナー遊びを設置して、探索活動を楽しむ時間を今後も作ってきたい。また、椅子に座りたくないときには、なぜ座りたくないのかを考えるようにもなった。まだ遊びたいのなら座るよう援助したり「〇〇したいのね」と代弁したりとその場面毎に寄り添うことがとても大事だと感じるようになった。本研究を通して、0歳児のやりたいことを受け止め、0歳児が自分で玩具を取りにいく、つかまり立ちをする、手掴み食べをする等行動全てが主体性であると考え、それぞれの気持ちに寄り添った保育をこれからも心掛けていきたい。そして何よりもスキップを大切に、安心した環境の中で園生活を送ってほしいと考える。このような実践の積み重ねによりのびやかに安定した日々を0歳児は過ごしている。まだまだ子どもの行動の意図が分からない時も多くあるが、自分の力でやろうとすることをこれからも大切にしていきたい。



次に、5歳児の研究の考察を次のように考えた。ルールの

ある伝承遊び「はないちもんめ」を通して、自分達が決めた事はとても意欲的で、自分達なりにルールを広げそのルールを守り、遊びを広げ、工夫する力、想像力、最後までやり遂げる力、コミュニケーション能力など、様々な力を得ていることが分かった。その中で、自由に遊ぶだけが主体性ではなく、ルールのある遊びの中でも主体性があることにも気付いた。しかし、遊びを進める中で意見の違いや遊びが行き詰る場面もあった場合には、保育教諭が子どもの声を聞き、子どもと一緒に考えたり共に試行錯誤したりすることで、子どもが自信をもって環境に関わっていくことができるようになるのではないかと思うに至った。保育教諭という“自分を受け止めてくれる”“困った時には手助けしてくれる”という安心する存在がいる中で一緒に遊ぶことにより、自分の意思も伝えやすくなり、子どもの主体的な活動につながって楽しい遊びとして進んでいくのではないかと考えた。子どもの主体性を育むためには、見守ったり受け止めたり、思いに応えたりする受容と応答の関りが大切なのではないか。子どもの大きな力を引き出せる為には保育教諭の言葉掛けのバリエーションや新たな体験となるようなアイデアをたくさん持つ事が大事であると改めて考えさせられた。

全体考察と課題については以下の通りである。①幼児期のSDGsについては、まず保育者がSDGsの保育における重要性を理解することが大事であると考え、研修の場を設定し共通理解してきた。実践を通して、子ども達は日常生活の中で「なぜ?」「どうして?」の疑問を持つ事が多くなり、自分達で調べたり、気付いたり、考えたりするようもなった。今後もSDGsを通して子ども達のよりよい成長に繋げることができるような環境を作っていきたい。②SDGsの実践はどれもこれも「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と複雑に絡み繋がっていることも分かった。これからも子ども達の「見たい、聞きたい、やりたい、関わりたい」等の言葉や反応を大切に、子ども達が主体的に関われる環境を整えていきたいと思っている。子ども達の今を大事にして、子ども達の未来に繋げていきたいと教職員一同願っている。③本研究を通して、本園の教育・保育を振り返ることができたことが大きな成果であった。本研究に取り組む前の遊びや活動は、保育者がルールを敷いて進めていたことに気付くこともできた。子ども達が主体的に取り組む姿を明確にイメージすることの大切さや子ども主体で遊びや活動を進める環境設定や援助の仕方を、本研究を通して何度も話し合いを重ね、本園に合った方法を模索してきたことは、これからの子ども達の成長に繋がるものであったと考えている。今後も子ども一人一人の主体性を育む保育を追求していきたい。

<話し合った内容>

- (問1)子ども達がそれぞれの思いを実現し、楽しんでいたという場面がありましたら教えてください。
- (問2)子ども達が主体的に活動できるような環境になっていたでしょうか。よかった点やもっと工夫が必要な点について教えてください。
- (問3)子ども達が自ら選んだ活動を十分に楽しむために保育者として工夫していることがありましたら教えてください。

④グループ協議

参加者には公開保育参観後、「問い1・2・3」に対して、フィードバック(付箋)をしていただいた。AからHの8班のグループに分かれ、ファシリテーターの進行のもとフィードバックの内容について話し合い、各グループからの発表があった。

各グループで話し合われた内容を、各学年の項目に起こし下記に示す。

<0歳児>

(問1)

・初めての粘土の感触を味わっている子、カップで型抜きしている子、カップを逆さまにしている子等、それぞれの遊びを自分で考え楽しんでいた。

・手作りの玩具が沢山あり、

子ども達は思い思いの遊びを考え遊んでいた。シフォンの布地が大好きで声を出したり手を広げたりして楽しく遊んでいた。

(問2)

・でんでりゅうばの人形の作り方の質問があり園から作り方の説明があった。

・粘土遊びや砂遊びの安全対策についての質問があり、この子にはこの先生が見守るなど担当確認を事前にし、安全・安心の遊びの環境を作っているとの話があった。

(問3)

・保育教諭が子どもと一緒に遊び、「気持ちいいね」と子どもの気持ちを言葉にして語りかけていた。

・保育者は子ども一人一人とのふれあいを大事にしていた。

・ゆったりとした雰囲気の中で、保育教諭は子ども達がやりたい遊びを思い切りやらせる環境を作っていた。



<1歳児>

(問1)

・空き箱やパック等の再利用した手作りの玩具や沢山の遊ぶコーナーがあっ



て子ども達は安心して好きな場所で友達や保育教諭とおまごなどいろいろな遊びを楽しんでいた。

・手作りのおうちに好きな絵を描いたりシールを貼ったりと、遊びを変化させ工夫して遊びがどんどん広がって楽しく遊んでいた。

(問2)

・自由に取り出す事ができる玩具コーナーや絵本コーナーについての質問があり、園側からは玩具や絵本で遊ぶ時間が毎日ある事等いろいろな遊びに触れあうことができるよう工夫しているとの話があった。遊んだ後はお片付けの習慣化を図り、基本的な生活習慣を身に付けさせているとの話もあった。



(問3)

・ごっこ遊びをしている時に子どもの声を拾って、子どもの世界観を壊さないような声掛けや、子どもの興味・関心を引き出す声掛けをしていた。
・保育室が開放的でやりたい遊びが思う存分できるよう工夫されていた。

<2歳児>

(問1)

・新聞や廃材の製作コーナーではいろいろな物を作って遊ぶ子ども達、そして作った物でお店屋さんごっこをして遊ぶ子ども達。子ども達は一人一人やりたい遊びを自由に選んで楽しく遊んでいた。



・支援を必要とする園児にも保育教諭は優しく寄り添い、やりたい気持ちを大事にして一緒に遊び、園児は楽しく遊んでいた。

(問2)

・剣を上手に子ども達は一人で作っていた。いつ頃から取り組んでいるのかの質問に、2歳児になってから取り組んでいる事、剣づくりは男の子が大好きな遊びでいつも盛り上がっている事、短く切ったテープでの作り方を教えるとだんだんと上手に作るようになった事など園から話があった。

(問3)

・保育教諭は子どもの自分でやろうとする姿を尊重し、一緒に楽しく遊んでいた。コーナー毎に保育教諭がついて見守り、安全面の配慮が十分になされていた。子ども達も安心して落ち着いて遊んでいた。

<3歳児>

(問1)

・新聞遊び、廃材遊び、ごっこ遊び等いろいろなコーナーで子ども達は遊びに集中していた。
・製作コーナーでは材料が沢山あり、子ども達は作りたい物を友達や保育教諭と共有しながら遊んでいた。

(問2)

・テープが切って準備されていた事についての質問に、園からは子ども達が使いたい長さは切って使っているが、SDGsの「もったいない」気持ちを大切に、半端な長さのテープも子ども達は大事にして遊びに使っているとの話があった。



(問3)

・夢中で遊んでいる子どもには声かけはなく見守り、子どもから発信があった時のみ応えていた。子どもと同じ目線で関わり子ども達は安心して遊んでいる様子。子ども達の世界観を壊さないようにする工夫をしていた。
・「片付けてね」ではなく「玩具のねんねの時間だね」と玩具の気持ちになって優しく語りかける保育教諭、さりげない援助をしながら子ども同士のやりとりができるように仲立ちする保育教諭、ハサミになれていない子どもには切ったテープを準備するなど、保育教諭の優しさが子ども達の遊び込む姿になっていた。

<4歳児>

(問1)

・サツマイモの蔓から綱引きや縄跳びなどに遊びが広がり、笑顔で楽しく遊ぶ子ども達。綱引きになると保育教諭が審判になって、のびのびと遊んでいた。

・野菜スタンプ、新聞紙遊び、廃材を使った遊び等、子ども達が自らしたい遊びを選んで楽しんでいた。

・黙々と新聞で洋服を作ったりシールを付けたりして、自分で想像して作る環境の中で子ども達は楽しそうだった。

(問2)

・どの子も想像豊かにいろいろな遊びを考え楽しく遊んでいたが、どのような配慮をしてきたのかの質問に、園からは子ども達の「〇〇やってみたい」の声をしっかりと聞いて、子ども達と一緒に新たな素材を見つけたり工夫させたりしてきたとの話があった。



(問3)

- ・新聞紙で野球をしたりチャンバラをしたりと室内のスペースをその都度保育教諭が上手に作って、子ども達の思い切り遊びたい願いを実現していた。新聞紙遊びも「破いてもいいんだよ」と声をかけ、子ども達の気持ちをいつも盛り上げる言葉かけがあった。

<5歳児>

(問1)

- ・ビー玉が転がらない事を子ども達は試行錯誤して考え発見していた。支援が必要な子どもは保育教諭のそばで友達の様子を見て楽しんでいた。
- ・廃材の材料が仕分けされていたり、動線が確保されていたり、自分達で自由に製作できる環境の中で思い切り遊んでいた。

(問2)

- ・廃材を使って子ども同士で遊びを発展している姿が見られた。材料に関する制限はあるのかについての質問に、園からは物を大事に使う事の大切さを日頃の話や絵本から子ども達は学んでいて、子ども達も物を大事にしているとの話があった。
- ・5歳児のピタゴラススイッチ遊びに至った経過についての質問があった。廃材の箱で作っていた子どもがいて、周囲の子どもが興味を持ち発展していったとの事。秋の木の実が飾られていて雰囲気良かったが、どのようにして集めたのかという質問には、バスで近隣の公園に行き子ども達と集めたり、用務員さんの協力もあつたりしたことが話された。

(問3)

- ・振り返りを大事にして翌日も遊びたい気持ちを大切にしていた。自分達で考えている遊びを、保育教諭は誉めたり肯定したりする声掛けがあった。



<全体の感想>

- ・歌の歌い方がどの学年も上手である。どのように子ども達に教えているのかという質問に園からは、日々の積み重ねで習慣付けを大事にしている事、毎日いろいろな場で歌を歌っている事、「お歌の姿勢」をいつも確認している事、月に何度か音楽専門講師による音楽遊びもある事等子ども達は歌が大好きであるとの話があった。
- ・どの学年も、どの廃材を使ってどのように作るかを、友達同士で考える姿があった。園内では自然の物の装飾が多く、触れたり見たりする環境がよいと感じた。
- ・未満児にSDGsをどのように伝えているのかという質問に対しては、保育教諭自身が意識すれば子ども達に伝わる

事、特別な事はしていないとの話があった。

- ・どの学年も保育室の整理整頓が素晴らしい。廃材や素材が豊富にも関わらず片付ける場所が視覚化されていて、子ども達は自分で片付けたり、準備をしていたりという姿に感動した。
- ・コーナーを作り、配置が工夫されていて、安全面の確保がなされていた。
- ・子ども達の廃材利用が上手である。どのような働きかけをしたらよいのかという質問に対して、始めは道具の使い方を知らせ、一緒に遊ぶ事で経験を積んで今の姿となったとの事。子ども達が電車を作ったら保育教諭は線路を作ったり、ヒントを出して子ども自身に答えを促していったりと、遊びの展開の仕方に工夫があった。
- ・保育教諭は廃材の量の調節をして遊ぶ姿が見られた。空間の使い方が上手であり、年齢にあった保育環境が整っていた。
- ・年齢に合ったわらべ歌をくり返し歌い、発語に繋がっていると感じた。
- ・SDGsに関しては廃材を自由に使うなど種類別の分別や作ったものは持ち帰るなどして、捨てずに繰り返し使用するなど、子ども達の主体性はSDGsを通して培われていると感じた。

4 指導助言並びにご講演

福島学院大学 短期大学部 保育学科
准教授 鈴木 智子 先生

(1) グループ発表を通してのご指導

自由遊びの時間を充分確保する事により、子ども達は様々な可能性を生み出してくる。自分で選んで遊びを楽しむ事は、子ども達の成長には欠かせない。楽しいことを地域の方とイベント化していく事は、子ども達の家庭環境が様変わりしている昨今、行事を通して地域の方と触れ合い、人間関係を構築していく上では欠かせない。

4歳児クラスは芋掘りの経験から遊びが継続されている。今日は蔓遊びから縄跳びに変化しており、子どもは自由に遊ぶ時間で遊びをさらに広げていた。褒めて認める事によって、再び意欲的に新しい事を考えるようになる。遊びは発想力があるので、それを引き出していかそのままにするかは保育者である。季節の遊びを十分に体験させ、自然物との関わりは心の成長に繋がっていく。保育者は子ども達が今、何に興味があるのかを見逃さない為に保育記録を取り、振り返る事で子ども達の成長に



つながる。保育者がしっかりとコーナー遊びを担当し、フリーの先生が全体を見渡していた。先生方の連携ができており、子ども達の成長に繋がっていた。

秋の自然物を園内に配置することにより、子ども達の遊び込む力を育てている。季節感を大事にし子ども達を楽しませていく。廃材を種類別に分け提供されており、子ども達も自ら分別ができ、その後の遊びを作り出している。廃材を使って作ったものは無駄にせず、子ども達に保育者が投げかけ考えさせていることは素晴らしい取り組みだと感じた。保護者への廃材提供の協力体制がなされていた。各年齢ごとにSDGsについて親子で目標を立てて参加しており、園だけではなく家庭でも意識しながら取り組んでいく事で、継続し、結果が生まれると思われる。

各クラス先生方の連携ができており、子ども達は恵まれていると感じた。ドキュメンテーションで子ども達の保育を振り返っていくことは大事である。写真を撮って記録に残しておく方法で、子ども達の成長に繋がっていく。

年長児の朝のお集まりの歌の場面ではしっかりと子ども達は歌っていた。歌のポーズがあり、一斉的な活動でも集団の中でしっかりとした動きが身に付いている。幼保小連携、接続期の年長児においては自由遊びの時間を確保しながら、一斉活動のバランス等がとれており日々の保育がなされていると感じた。

3歳児クラスでは子どもが電車を作ったら保育者が線路を作り、興味深く遊んでいた。さりげなく環境を準備する事により、充実した遊びの一日が過ごせたと感じた。

掲示物は分かりやすく、工夫を凝らされていた。汚れず破けず毎年使える掲示物の工夫が見られた。保育の様々な場面でSDGsはできる事から、意識しながら日々積み重ねて行うことが大切であると感じた。

廃材は子ども達がそれぞれの種類に分けることで分別する意識も高まっていた。

わらべ歌の経験は伝承遊びに触れる幼児期が殆どで、何を伝えていくか、日本の四季折々の歌や遊びを通して子ども達に伝承することが大切だと感じた。昔から伝わる伝承遊びは、日本の心を伝える意味もあり、保育の現場で伝えていく必要がある。

今問題となっている不適切保育について、保育者は日々大変な保育をしてコロナ禍で疲弊しながら保育している。今年、福島市でも保育者のガイドラインを作成した。園内研修の中で自分の保育を振り返る事が大切であるとされている。保育者同士、何か違和感がある時には、それを違うと言えない環境があるかもしれないが、子ども達の最善の利益と思った時には、言える環境を職員間で作っていく事が子ども達を守っていく事であり、これからの日本を守っていく事であると思う。

(2) ご講演

「今の保育が子ども達の未来に繋がっていく」という事は、子ども達の人生を左右している事になる。人生百年時代であり、土台を作るのが私達である。そして、どんな事が起きても乗り越えていく力を育むための保育が重要である。未来を見据えた教育・保育の実践という事から、希望ヶ丘こども園は、生活、活動、遊びから、保育者が子ども達にふさわしい環境を考えている。今日の保育の中で保育者は、それぞれの年齢に合わせた環境を考え設定して体験させていた。幼稚園教育要領前文に今回の改定と同時に「持続可能な社会の創り手」という言葉が明記されており保育者は責任のある立場だという事を改めて考えさせられる。これからの世界、日本を背負っていくのが子ども達である。その子ども達の今を一人一人に寄り添いながら、未来を生きていく事が出来るように温かく見守っていくのが保育者であると改めて感じさせられた。

昨年から今年にかけてのグランドデザインの重点目標SDGsは誰一人取り残さない教育・保育の推奨である。希望ヶ丘こども園では、一つ一つしっかりと未来を見据えて、子ども達が感動したり気付いたり工夫したり考えたり実行したりできる保育環境を整えていた。主体的な子どもになって欲しいという願いは、今日の保育から確実に目標達成されているなど感じた。

子どもの主体性を育む保育環境をSDGsの視点に立って考えていくこと、そして主体性を十分に発揮できる環境を子どもと共に創る事、今日の保育はまさにその状況であった。クラス活動が始まる前の自由遊びの園庭の中でも一人一人が遊びを満喫していた。そういった姿から日々の保育が見えてきていると感じた。乳児期の育ちのつながりは小学校以降の後伸びする力として発揮できるようにする事、非認知能力を伸ばしていく事、知能指数では測れない能力、乗り越える力は、遊びから身に付いていく。今日の保育は自分で遊びを選択できる環境だから継続していったのである。そういった環境をしっかりと整えていく事で後伸びする力に繋がっていくのではないかと感じた。

【0歳児のエピソードから】10か月の人見知りの時期である。Kちゃんは以前に他園で集団生活を経験しているが、保護者の都合で転園してきた。Kちゃんの様子を先生方が共通理解しながら、保護者としっかり情報共有する事で家庭での様子を知り、どのようにしたら良いか考える時に、デンデラの歌と人形に行きついた。保育者がKちゃんの心を動かすものは何かを模索する。「今心が落ち着くのは何だろう」と思い、安心できる居場所、安心して生活できる空間を模索していった。保育者は一人一人の気持ちに寄り添いながら、安心できる居場所にて愛着関係を結び、安心して生活できる保障ができた。安心した環境で場面ごとに寄り添ってきた事でこの3ヶ月で歩行もしっかりして言葉も出てきて、友達と楽しそうに遊べるようになった。これは日々応答的な関わりをしてきた結果であり、どこの園の保育者もなされている

事かもしれないが、丁寧に関わっていく事が子どもの成長に大切であると事例を通して改めて考えさせられた。

0歳児の3つの視点(社会的発達、精神的発達、身体的発達に関する視点)を意識して関わっていく事で、気持ちが通じ合い、事例の0歳児のように変化が見られた。これは後々の5歳児の姿を見通した人間関係に繋がっていくのである。乳児の遊びを考える時には、身近な人の心地よい関わりの中にあり、その関わりを通して安心、安定が保障されて初めて周囲の物に興味を広げることができる。

【5歳児の事例から】はないちもんめの伝承遊びに興味を持ち、人数を調整していくことに気づき、遊びの中で数を学んでいく望ましい姿である。呼ばれていない子どものつぶやきを日頃から保育者が受け止めて投げかけていくことでまた一つ遊びが深まっていったと思われる。保育者は遊びの中で一人一人の思いに寄り添いながら、つかず離れずの中で遊びを見守っている。意見を出し合える人間関係から子ども達が成長していることを感じられる。また、適切な時期にはないちもんめを保育者から提供できていた。

子ども達は自分で決めたことに積極的に取り組み自分達なりにルールを繰り広げて守ることができる。工夫する力、想像力、最後までやり遂げる力、コミュニケーション能力が遊びを広げるのである。保育者は、主体性を育むためには見守る、受け止める、思いに応える受容と応答の関わり的重要性に気付くのである。倉橋惣三の「保育者は黒子のように子どもの遊びを支える」というこの言葉は説得力のある言葉である。年長児がピタゴラススイッチで遊んでいた時に、保育者はどこにいるか分からないくらい、子ども達は主体的に遊びを展開していた。

「人はどのように育つのか?」、0歳児は保育者の愛情深く応答的で穏やかな関わりを重ねていく事で、5歳児になり、自己を調整し学びへと向かう力になっていくのである。保育者は、共同して取り組める機会を作り、子ども達が力を発揮していく姿を認めていき、遊びの中で学びを深めている姿を受け止め園と家庭との連携を大切にしていきたい。人は生まれながらにして自ら育つ力、周囲の環境に能動的に働きかけようとする力を持っているのである。

公開保育園から感じた“子どもの主体性を育む為に大切なこと”は、①一人一人が、遊び込む時間と場所を確保し子ども達で決められるように見守って待つ保育者の姿勢。②異年齢で園児同士が主体的に関わる環境を「一日の保育に取り組む工夫」そして自分に合ったものを選ぶ体験を重ねる事。③季節に応じた子どもの興味を引き出す体験活動である事。④「子どもが興味を持っているか」の視点を持つ。⑤保育者の指示ではなく問いかけや子ども自ら考える環境や遊び込む中で、自分も相手も尊重する気持ちを育む事。⑥子どもの気持ちを丁寧に言葉でつなぎその子らしさに気づき、認め尊重し合える関係作り。⑦同僚、子ども、保護者、地域との共有等。SDGs が幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿に複雑に絡み合っている事で、すべてが繋がって

いるのだと感じさせられた。私たちがこれからできる事は、今日学んだ事、気付いた事、感じた事を自分の保育に取り入れていく事である。

5 公開保育を振り返って

本大会の公開保育を受けてから、この1年半、本園の教職員は時間を作っては、「より良い保育とは」「主体性とは」「SDGs と保育とは」について何度も話し合いを重ね、本園に合った方法を模索・実践してきた。教職員一人一人が、園児一人一人と向き合い、「園児が遊び込む環境」や「園児がワクワクする環境」を提供し実践してきた結果、子どもの大きな成長に繋がったと考えている。子ども達の主体性を育む教育・保育環境を、SDGsの視点に立って考え実践してきた本園の取り組みの重要性を、本大会において参会者の皆様と共有できたことを大変嬉しく思っている。

結びに、一昨年度までご指導を賜った故 横山文樹先生、後をお引き受けいただいた鈴木智子先生には心より感謝申し上げ、今後も保護者の皆様のご理解とご支援をいただきながら継続して、子どもの主体性を育む教育・保育に取り組んでいきたい。

